



次 目

大法鼓經の概要……………	本	多	日	生
隣保事業の社會的基礎……………	山	口	正	
菩薩行に就て……………	本	多	日	生
肺結核治療の秘訣……………	奥	田	史	郎
聖訓摘要……………	本	多	日	生
太郎星……………	杉	山	茂	樹

第三十三卷十一月號



# 教

第二卷第五號出づ

本誌執筆著者

その堂々たる内容  
各方面の名家執筆

本多日生  
後藤新平  
床次竹二郎  
永井米蔵  
岩野直英  
高島平三郎  
佐藤鐵太郎

本多日生現下著書

(現在品のみで、買切れのものは注  
文されても餘計な手数で困ります)

本尊論	布装 一部 金 七拾 銭 送料 一部 金 四 銭
法華經要文	布装 一部 金 五拾 銭 送料 一部 金 二 銭
法華經の行者日蓮	一部 金 十 銭(送料共) 廿部 金 一圓五十 銭(送料共)
修法勸行の心得	一部 金 十五 銭(送料共) 十五部 金 一 圓(送料共)
教育勸語の思想問題	一部 金 廿 銭(送料共) 十部 金 一 圓(送料共)

名古屋市東區田代町城山

統一編輯局

振替名古屋一〇八一九

多數購讀の節は特別割引御座下さい。

發行所 教發行所

東京府荏原郡品川町南品川四二二

(振替東京一〇九四〇番)

毎月一日 十一日發行 一部金十銭

## 大法鼓經の大要

本多日生

大法鼓經は法華部の中に有力な地位を占めて居るので、私の考では妙法蓮華經を王様に譬へれば、大薩遮經が飛車、この大法鼓經が角といふやうな位置に當ると思ふ。この經は法華經の教義の主なる事柄を一層明瞭にすべく説かれて居るので、法華經の大事な點と言へば、今更繰返すまでもなく、一切經の開顯と申して、佛敎の經りを附けることが法華經の一つの特色である。それから人々の有つて居る佛性を明かにすること、それから佛様に就ての眞實を説き顯すこと、その他佛敎に關しての誤解に陥り易き事を匡正して眞實義を明かにすること、それから世

間と佛敎との調和を採つて、佛敎をして眞に文化を指導するところの役立つ教たらしめるといふやうな事が、法華經に就ての大事な點である。大法鼓經はこれ等の意味合を明にしたお經である。大薩遮經は菩薩行の方便を明すと申して、菩薩行の實際應用に關しての事柄を説いたので、その中には佛法と國家又は政治、戰爭、刑罰、道德、一般の生活といふやうな、人生の實際問題と佛敎との關係を明かにして、菩薩は出世間の眞實境界を離れずして、世間凡俗の境界に應同してこれを救ふ、高きに居て低きを濟ふ、寂かなる所に居て騒しい世の中にはたらくといふや

うな意味を懇々と能く説いて、今の多くの佛教徒が陥つて居るところの弊害、即ち社會とかけ離れ過ぎて居るとか、實際生活の効力が無いとかいふやうな、化石したる佛教、厭世的の佛教、さういふやうな嘲笑を受けて居るところの佛教の弊害を悉く匡正することが大薩遮經の中に出で居るのである。元來法華經の主義がさういふ意味を明かにせられて居るのであるけれど、大薩遮經により、大法鼓經に依つて今申すやうな意味合が更に明瞭に相成る次第である。それ故に私は大薩遮經が飛車のやうなもので、大法鼓經が角のやうな位置を占めるものであると考へるのである。

從來は法華經の宣傳にはたゞ法華の文句のみを應用して、法華部の諸經すらもこれを活用する手段に出でなかつたやうに思はれるのであるが、それは面

匡正して居るものが法華經であり、さうしてその點を更に明かにして居るものが大法鼓經である。

又一種の誤解は、佛教は無我の思想を説く、無我の思想といふのは、吾々の本質本體は實在でなく、随つて死んだ先などを教へる必要はないといふ思想である。大體我有りと思ふのが迷ひである。そんなことを考へないで、一切空である、善いと思ふ事も悪いと思ふ事も夢である、我有りと思ふ心も迷ひであるといふ風に、一切を打消して行くところの無我の思想といふものがある。この思想は用ひ方に依つて非常に役立つことであつて、多くの達人があまりに自我の觀念に囚れ過ぎて、たゞ今日の滅び行く自己だけが自分だと思つて、さうして跪き苦んで居る、そこに罪惡も行はれて行くのであるから、さういふ俗な自我の風情に泥着して居る謬見を匡正するが爲

白くない態度である。法華經には大薩遮經に説かれたが如き俗諦開會と申して、世間の事柄と佛教の事柄を調和して、いき／＼とした役立つ佛教としては、たらく意味合は、無論法華經の思想として顯れて居るけれども、それが極めて簡單であつて、その詳細の意味合が明かになつて居ない。大薩遮經を加へてこれを見れば、その法華の俗諦開會の思想が頗る明瞭と相成る譯である。又法華經に依つて他の經々の誤解に陥り易き點——誤解に陥り易き點といふのは、佛教が多岐散漫に失して居ることから、いろ／＼の事が雜然と説き散されて、それが中心やら、それが眞實やら、何處に歸結するのやらわからぬやうな、龐大な教となつて、ちようど今日の支那の國家のやうな具合に、何處に中心があるかわからないといふ風な事柄が佛教の一大弊害であるが、それを明瞭に

には無我の思想は役立つものであるけれども、それが佛教の結論であると考へた時には、佛教は大きな缺陷ある教となるのである。併ながら誤つたる佛教観は、禪宗を始めとして天台宗などに於ても、その他一般佛教の哲學方面に於ては、さういふ無我の思想を極致と考へられて居る、般若經を通し、或は楞伽經、首楞嚴經、禪宗で用ゐる維摩經といふやうなお經を讀む者は、一種の誤解を伴うて、佛教は無我の教である、その意味から考へた時に、法華經の思想、法華宗の人の考へて居るやうなことは間違つて居ると思つて居る、却つて深く佛教を研究した高き思想家と思つて居る人にさういふ誤解がある。その點を大法鼓經は極めて明晰に、無我に關する誤解を匡正して居るのである。

その他前に申したやうな大事な法華經に依つて明

かにされて居る思想が、更にこの經に於て明瞭になつて居るのであるから、その意味に於てこの經の大意を御紹介して置かうと思ふのである。

從來兎角法華經の研究者でも、その經の重要な教義を把住することが甚だ漠然として居つて、いろいろの事は知つて居るやうだけれども、その要領を概括して行くことが甚だハツキリしないのである。餘程長く研究して居る人でも、往つたり戻つたり同じやうなことをやつて居るやうに思はれる。大法鼓經の如きは頗る説明が明瞭であるから、そこで法華部の要點を斯ういふ他のお經から立證する、たゞ法華經の内ばかり見て居ないで、法華部の他のお經に依つて法華經を固めて行くといふと、法華經の大事な所が何處にあつたかといふことが能くわかる譯である。法華經だけを往つたり戻つたりして居るとい

も、その他は何にも知らぬやうなもので、さういふ狹隘な思想觀念といふものは、精しいやうであつて却つて偏して居る。豆腐屋の親爺の言ふことは、下谷區に關して完全なる知識を有たないやうなもので、今でも各宗の坊さんは、まア大抵その豆腐屋の親爺のやうなものである。それでは佛教の大切な所を把住することが出来ない、そこで横から大法鼓經のやうなお經を研究して、立返つて法華經を考へるといふと、成程この點が大事であつたのかといふことが能くわかる譯である。さういふ意味に於て大法鼓經の大意を知ることが非常に大切な價值を生ずると思ふ。

この大法鼓經といふ表題は、この經の中に「佛迦葉に告げたまはく、汝今當に問難の桴を以て大法鼓を擊つべし、如來法王は當に汝が爲に説くべし」と

ふと、却つてその事が能くわからない、例へば高い所に登るとか、或は横へ退いて見ると、今まで自分の居つた所が能くわかるやうなものである。東京の下谷區の中に住んで居る人は、下谷區といふものが却つて能くわからない、それよりも上野の山に登つて、始めて田舎から出て来た人が下谷區の地圖を披けて「ハ、ア、これが下谷區か」といふことになる、下谷區に居る豆腐屋の親爺よりは、初めて出て来た田舎の親爺の方が、下谷區といふものゝ大體を理解することが出来るやうなものである。佛教の研究者が或る一局部に没頭して、阿彌陀經なり般若心經なり、そこへ頭を突込んで、子供の時分から頭の禿げるまでそればかりやつて居る者は、下谷區の裏町の豆腐屋の親爺みたやうなもので、自分の毎日廻る所は五町か十町の所を何十年と廻つて居るけれど

言つて、法の鼓を撃てといふことを説かれた、それが最も大切な法であるが故に大法鼓と名けたのである。それは即ち法華經の法鼓を撃つのである、釋迦如來が迦葉尊者に對して、汝はこの鼓を撃て、佛は大きな鼓の如きものである、その撃ちやうさへ宜ければ必ず鳴るといふので、問難の桴を以て撃てよと言はれた。桴といふのは太鼓を叩くところの棒を言ふのである。そこで迦葉がその問難の桴を以て撃つことに於て、釋迦如來がいろいろお説きなされた、それを大法鼓が鳴つたといふのである。そこでその鳴り方が法鼓には、天鼓と、それから毒鼓又は戰鼓とがある、天人の撃つ方の鼓であればやさしい方の意味合をあらはす、愛語と言つて親切にやさしく教へる場合を天人の撃つ鼓に譬へ、戰の鼓といふのは誤つたる思想觀念を擊破する爲に打つ鼓であつて、

折伏の鼓である、そこでこの大法鼓經の法鼓は戰陣の鼓なりとお經に説かれて居る。即ち法華經の思想に依つて、誤つたる佛教觀念、誤つたる世間の觀念に對して、これを擊破るべく戰陣の鼓を撃つた意味に於て大法鼓經と稱せられて居るのである。

それ故に法華經の折伏思想を考へる人は能くこの經を研究しなければならぬ、たゞ折伏といふことは日蓮聖人が言はれた念佛無間禪天魔だ、それだけを覺えて何處でもそれを振廻して、意味が能くわからぬ人が多いやうであるが、法華經の折伏戰陣の鼓といふのは、たゞさういふ宗旨が出来てから始めてさういふことを言つて居るのではない、佛教觀の上に於て誤解を匡正すべく教が立てられて居るのである。それは前からいろ／＼申して居る如く、即ち佛教の誤解を惹起す者に對して、その事に就て教へられた

か、その隠されて居るといふのはさういふことではありませんか」と尋ねた。佛が仰せられるのに、隠されて居るといふことの一番大事な問題は、如來の涅槃に關して、如來は涅槃すと雖も常住不滅であるといふその人格實在の義が明になつて居ない點である、それが方便の教であるといふ初めにさう言はれた。さうするとそれが一番大事な點であつて、法華經といふものはそこを注意してお説きになつたものであるといふことが直ぐわかる。今までの法華研究者はなか／＼そこまで行かない、「法華經はどんなお經ですか」「どんなお經と言つてそれはいろ／＼有難い事がある……」いろ／＼といふのはそも／＼ごまかし言葉である、「いろ／＼結構だと仰しやるがさういふ事がありますか」「さういふ事と言つてそれは一概に言へない、澤山ある」といふやうな譯で、どこ

が故に大法鼓經と名けるのである。

この説法は、舍衛國といふ靈山に近いところの國の給孤獨園といふ所に於て説かれたのであるが、その時に佛が迦葉に告げて言はれるには、今この處に集つて居る人達は皆統一清淨なり、立派な人達ではあるけれども、併しまだ佛教の教に就いて眞實を現はさない所、即ち方便の説に對して能く了解しない事があると言はれた。それが即ち大法鼓經の起つて來る出發點である、佛教の方便の教に對する正當なる理解を有つて居ない者がある。その佛教の方便の教に對して正しい意味の見解が打立てらるれば宜いのであるけれども、方便の教に迷ふとか、方便の教にひつ掛るとか、方便の教に對する正當理解といふものを缺いて居ると斯う仰せられたるに就て、迦葉が申上げるには「さういふ事が方便の説であります

まで行つても法華經の中心思想がわからない。ところが今この經に依れば、隠されて居るといふのは、如來の涅槃に關しての常住不滅といふ意味が明かになつて居ない。元來涅槃といふことは毀れてしまふとか消えてしまふとかいふことではない、今大法鼓經に於て説く事は、その覆ひ隠されて居つたものを取除いて明かに説くのである、如來の涅槃に關する眞實を説くのである、さうして最も明瞭に、誰が聴いても能くわかるやうに、隠す所無く、覆ふ所無く、分明に如來の實相に關して「明顯の音聲百千の因縁もて分別開示す」と言つて、様々の側から能くわかるやうに因縁來歴を加へて如來の不滅實在を説くのである。それであるから此處に集まれる人達は皆な立派な人だけれども、モウ一通能く調査して、その中にあまりつまらない人達が居るならば、それ

はこの席より去らしても宜しいと言はれた。去らし  
ても宜しいといふことは法華經の方便品にも出て居  
ることであつて、それは眞實を説くが爲に、それを  
受容れないやうな人達はこの席を去つても宜しいと  
いふことである。

ところがそこに集つた中の考の低い人達は、斯  
ういふことを考へた、自分達は今この大法鼓經の説  
法を聴くに堪えない、何故かと言へば、今まで如來  
の涅槃と言へば消えて無くなるやうな意味にも考へ  
て居つた。然るに涅槃といふことは消える事ではな  
い、常住不滅の意味だといふことをお説きなさらう  
とするのである。それ故に自分達は今まで考へて居  
つた通りに、如來の涅槃は消えたやうな意味だと思  
つて居る、これで十分である、モウこれ以上話を聴  
く必要はないと思ふといふので、その法座を去つた

法座に安住するのみではない、その教を聴き終つて  
能く受持ち、廣く世にそれを傳へて、世間の人々を  
も導き、一切の佛教に現れて居る方便の教の意味合  
をも了解し、眞實の教と眞實でない教との關係をも  
見分けて、佛教が條然として筋立つた立派な教とな  
る、さういふ觀念を有つ人達がそこに残つたのであ  
る。

その佛教の方便眞實といふことの中心の問題が、  
佛身の常住不變を信解する者と言はれて居るのであ  
る、法華の信者といふのは如來の人格實在を信解す  
る者を指すといふことが能くわかる。たゞ今までの  
やうに法華を信すると言へばお經を信する、「お經を  
信すると言つてお經の何處を信する」、「何處といふ  
ことはわからぬけれども兎に角お經を信する」とい  
ふやうなことは甚だ意味をなさぬ事である。前に言

のである。それは何故去つたかといふと、佛法の空  
見——前に申す無我とか空とかいふことを誤解して、  
それが佛法の結論だ、一番善い所だ、斯う吞込過ぎ  
て空見に墮落し、今方便を除いて眞實を説かれると  
ころのこの經に於てこれを受容れることが出來ず  
して、却つて座より去つたのである、洵に氣の毒と  
も何とも言ひやうの無い事である。折角如來の教を  
受けながら、一番大事な教が説かれんとするに當つ  
て、自分の誤解の爲に法座を去るといふやうなこと  
ほど淺ましき事はない。併しそれは極く一小部分の  
者で、多くの人はそこに残つたのであるが、その  
人々はさういふ考の人が残るかと言へば、如來の  
肉身は滅し給うたけれども、その法身本體の如來と  
いふものは常住不滅であるといふことを信解して居  
る人達、それは喜んでこの法座に安住し、嘗にその

ふ通りたゞそのお經の中だけに頭を突込んで居つて  
見ると、何處が一番大事だかわからぬやうなことに  
なる。豆腐屋の親爺が毎日自分の店の周囲の五六町  
の範圍だけしか廻つて居ないから、その範圍に於け  
る事しかわからない、その内に少し大きな芋屋でも  
あつたら、「あの焼芋屋はモウ長いことやつて居りま  
して、なか／＼分限者であります」といふやうなこ  
とを言つて居る、まだ／＼その他に東京市民として  
は立派な家が澤山あるのを知らずに居る。今まで法  
華經に就て論議されて居る中心が今申した事に於て  
非常に明瞭である。一つは如來は常住不滅なりと  
いふことが如來の涅槃に關する思想である、一つは  
佛身の常住不變を信解する者が法座に残つたといふ  
ことに於て、法華經の中心思想がどこにあるかと  
いふことは、明瞭過ぎて居るほど明瞭である、少し

も疑ひを残す餘地は無い。

尙ほ佛が説かれるには、佛敎は淺い所もある譯で、大勢の人達が小乘の戒律を學んで、さうしてその小乘の戒律に安住して能くそれを守つて行く者は、如來はそれに對して人天の安樂を與へた。人天の安樂といふのは、今度生れ變つても人間界天上界に生れて幸福を受ける身となることが出来る、佛敎の一番淺い所はさうなつて居るのである。今度生れ變つて立派な所に生れて來られるといふことは、世間の人はさういふことを非常な幸福と考へる人が多いかも知れぬけれども、佛敎ではそれは一番淺い所になつて居る。一段進んで更に大功德を得て進んで行く者には、四眞諦の解説——四眞諦といふのは四諦の法と申して、今度は寂滅涅槃の阿羅漢果の聖者たらしめることが出来る。その者には素絹と申して眞

く小さき人間が佛になるのではない、その胸にしまつてある佛性の大我が現れる時、それが即ち佛様になるのちやといふ意味を説くのである。即ち四眞諦の解説から更に増上信解して佛性論に入つて、その佛性の常住を信じ、それが現れて佛になるといふことを信解する者には、如來は薩婆若と申して最も大切なさとりりの水を注がれる、薩婆若といふのは梵語であるが、一切智相と譯するので、佛の眞實のさとりを言ふのである。そのさとりの智慧の水をその人の頂に灌いで、大乘の素絹即ち眞白な絹で拵へた冠をかむらして下さる。この水を灌ぐとか冠をかむらせるといふことは譬喩であるけれども、非常な光榮な事を意味するのであつて、増上信解して佛藏の大我、即ち自分の胸に佛性があるといふことから、その佛性が顯れ出でて佛になる、その佛は常住不滅

白な絹で拵へたところの冠を佛が執つてお與へなされるのである。それから更に増上信解と言つて、別に變つた事ではないけれども、その四眞諦の苦集滅道の四諦の思想が更にだん／＼伸びて行けば、それが直ぐ大乘である。さうしてその大乘と言はれるのは佛藏の大我と言つて、吾々凡夫としての自己は滅び行くけれども、その中に佛性を貯へて居る、佛藏といふのは人間の胸の藏の中に佛性があるといふ意味で、それが大我である、眞の我である。今日普通の人が我と思つて居るのは小我であつて、それは消えても行くし始終動搖を免れない、年も取れば病氣にも罹る、迷ひもするけれども、その人間の胸の藏の中にもまづてあるところの佛性の自我なるものはさういふものではない、それは常住の法身となつて現れて、それが佛様になるので、吾々のこの魔れ行

のものちやといふことを確信する時に於て、佛はさとりりの水を頂に灌ぎ、大乘の冠を執つてかむらして下さる。この頂に灌ぐとか冠をかむらせるといふのは位を繼ぐ意味であつて、授職灌頂と申して、佛様の御位を繼ぐ世嗣の式と申すのである、佛性の自我を信解する者は佛の御位を繼ぐべく、頂に薩婆若水を灌ぎ、大乘の素絹を以て冠らしめるといふことを佛より誓つてさう仰しやつて下さる。そこで大迦葉よ、特に今汝に對してもこの意味合に於て大乘の素絹を汝の首にかむらしめるであらうと仰せられた。

さうすると前には如來の涅槃常住を説き、今度は佛藏の大我を説くと言つて、その佛藏の中にある眞の永遠不滅の大我を信解する者は、佛の御位を繼ぐことが出来るといふのであるから、前には如來の

涅槃に關して不滅常住を説き、今は佛藏の大我に關して不滅常住を示すといふやうに、茲に佛身觀と佛性觀の二つが順序よく現れて來て居る譯である、法華部の大切なお経はさういふ意味に現れて居るのである。それから更に前に申した通り佛が迦葉に對して、問難の俘を以て大法鼓を撃つべしと仰せられる順序になつて、さうして迦葉が第一に申上げるには「菩薩の名を聽く者でさへも衆生は三種の毒箭を除くと申して、貪慾瞋恚愚痴の三つの毒箭がそれが爲に除かれるものである、ましてや世尊の御名を聽き、その名號功德を稱讚して南無釋迦牟尼と唱へ、又釋迦牟尼の御名御功德を讚め奉れば、如何なる衆生でも三種の毒箭を抜くといふことは申すまでもないことである。菩薩の名を聽くすら三種の箭を抜くのである、ましてや釋迦如來の名號功德を稱し、南無

釋迦牟尼と唱へる人は三毒の箭を抜くことは言ふまでもない。その上に大法鼓經のこの意味合を以て人々を教へ、これを慰め、これを導き、この教を演説する人は、言ふまでもなく衆生の三毒の箭を抜き去る譯である。

三毒の箭を抜き去れば、現在生活には苦しみを除いて、さうして貪慾、瞋恚、愚痴といふものが無くなるのであるから、罪をつくることも免れて、遂には佛に成る譯であるから、茲には釋迦如來の名號の功德を稱讚せられて居る次第である。

## 隣保事業の社會的基礎

山口 正

隣保事業は英國に創始されてから既に七十年の歴史を有し今日廣く世界各国に普及された爲めに、其の間に於ける社會狀態の著しき變化と各地方特殊の社會的事情とにより、カノン・パーネット(Canon Burnett)が、教養のある人達が諸階級の人々を一の社會に結び付ける爲めに、充實せる生命と豊富な思想とを貧民とともに預つことによつて、貧の最悪の禍害即ち不潔な住宅に住み不健康な仕事場に働かされる那の享樂に耽る生命の欠亡を打ち破るであらう、といつたやうなその本來の意義の動搖を免れなかつたし、今日廣く一般に意味せらるゝ所も亦必ずしも同

じくないが、本來社會的人格の開展を中心思想とし教化の方法によつて共存共榮の社會即ち共同社會の組織を目的とする一種の社會運動であることは一般に認められる所であらう。少くとも現下我が國に於ける通念に従へば、隣保事業は單にセツツルメントを意味するに止らず、更にウオード(Edward J. Ward)によつてロチエスター市に於て始めて試みられたるコンミニユニティー・センター(Community Center)即ち小學校其の他の學校々舎を附近住民の社會生活の中心とし、その地方小區域に於ける社會的經濟的及び政治的生活を改善せんとする運動が多



分意味されてゐる。故に我が國に於ける隣保事業の觀念は英國に生れたセツツルメントと、米國で創められたコミュニティー・センターとの綜合であつて、それは一方に於て血縁團體としての家族の整序を意圖すると同時に、それ以上に地縁團體としての地方小區域の社會生活の組織を目的とする。斯くの如き隣保事業を施設しその事業を發展せしむるが爲には、その經費を支辨すべき經濟的基礎の必要なること言ふを俟たないが、他面斯種事業は現代社會の要求する最も重要なものであり、又その事業がよつて以て運営せられねばならぬ指導的原理を確立する所の社會的基礎を考慮せねばならぬ。換言すれば我々は何故に現代社會に於て隣保事業の施設を必要とするや、それを必要とする場合に於て如何なる方針のもとにそれを施設經營せねばならぬかの社會的基礎を明か

にすることは我々社會事業家に取つて非常に重大な問題なのである。

我々は往々獨立的に専ら個獨的生活を營み得るものやうに考へるが、我々人間は意識の發生と共に社會生活に入り込み、他の人々と社會關係に立つ。社會關係とは親和の場合は勿論鬭争の關係をも含む人と人との相互關係であることは今日一般に認むる所であるが、この相互關係の根本的の定型とする、所謂基本的な社會關係若しくは定型的な社會關係に至つては必ずしも定説なく學者によりてその分類を異にする。故に今最も古く確立され又最も簡單で且つ廣く研究せられる所のフェルデナンド・テニス (Ferdinand Tönnies) の説によると、基本的社會關係は相互扶助的の共同社會關係 (Gemeinschaft, Community) と個人主義的の利益社會關

係 (Gesellschaft, Society) とに分たれる。共同社會關係とは本質意志のもとに結合する有機的結合であつて會社殊に株式會社をその典型とする。前者は自然的、犧牲的、相互扶助的の共存の關係であるが、後者は人爲的、利己的、打算的交易又は雇傭の關係である。而して時所的にあらゆる分離に拘らず恒に精神的に結合せるは前者の特徴であり、あらゆる結合に拘らず常に精神的に分離せるは後者の特徴である。テニスによれば社會關係は根本的には此の共同社會と利益社會の二種の社會關係に分たれるのであつて此の他にないのである。而して今社會的人格の開展を根本思想とする隣保事業は兩者の中何れの社會關係を基礎とするやを考ふるに、先づ隣保事業の原語を見るに獨逸語にては一般に Arbelkgenelinschaft 勞働共同社會といふ文字が用ひられてゐ

る點よりして勞働者の共同社會關係の開展を意味するものと解される。更に隣保事業の意義を検するにバジール・エイ、イークスリー (Basill A. Yeakle) はセツツルメント事業は Community work (共同社會事業) であるといふに鑑みそは共同社會關係を維持促進する爲めの事業であることが知られる。故に隣保事業は人間の社會關係中共同社會關係の開展を所期する。即ち人間特に勞働階級の人々が本質意志のもとに有機的に結合するの生活を企圖するものに他ならぬのであつて、隣保事業の社會的基礎は人間の共同社會關係にあることを知るのである。之れ創設者達が目標とした人道主義的社會運動の義も亦之に他ならぬのであり、又アーサー・シー・ホルデン (Arthur O. Holden) がセツツルメントは慈善でなく家族であるといひ、アーブ (E. L. Parr) の

いふ善き隣人の交際を組織立てることを意味するのである。故に隣保事業は第一に而して主として共同社会關係の確立促進を目的とし、その典型として家族關係を中心として近隣の如き地方小區域の共同社会關係、換言すれば共存共榮相互扶助思想の充實發展に向はねばならぬのである。此の意味に於て隣人指導の形に於ける奉仕といふ隣保事業の哲學も亦理解されるのである。

然るにテニスは歴史の進行と共に人間の社会關係の形式が共同社会關係から利益社会關係へ進化し現に利益社会關係が優勢を占むると謂ふ。而して將來共同社会關係が再び優勢となり得るや否やについては異論があるが少くとも現に利益社会關係が優越することは廣く一般に認めらるゝ所であつて、中世ギルドより近世の會社への企業形態

スは最近組合といふ名稱のもとに主として無産者が第一に商品の共同購買の爲めに次に彼等の需要の自己生産の爲めに結合したが、それは大なる勢を以て重要なものとなり之によつて利益社会的な生活條件に適應せる形に於て共同社会關係の經濟的原理が最も顯著な發展をなし得べき新しき生命を獲得したことが認められるといひ、ウエーバー (Weber) は消費組合は共同社会關係にあらずりとて利益社会關係でなく兩者の綜合であることを論証する。此に所謂組合運動とは消費組合運動を指すのであらうが、而して我が國の信用販賣、購賣及利用等各種の組合を含む産業組合を意味せしむることには反對者が無いひはよいが、私は其の間多少性質及方法上の相違のあることは認めるけれども、此の組合運動を以て我が國の産業組合の全部を意味せしめたい

の進化の如き最も雄辨に此の事實を物語るのであつて、是れ利益社会關係の弊に對へずしてその弊から免れんが爲めに之れが矯正又は轉回策として共同社会關係を基礎とする隣保事業が現代に於て非常に要求される理由であり、又利益社会關係の優越な都市に於て特に必要な根據である。然らば現に優越する所の利益社会關係を無視し、少くとも度外視して隣保事業は共同社会關係に基礎するの故を以てそのみを指標として進まざるべからざるや、少くとも利益社会關係を考慮に容れて共同社会關係に指向するを穩當とせざるや又之に該當する事業なきやの疑問が生ずる。利益社会關係を考慮したる共同社会關係精神及その運動は較近世界に於て長足の進歩を遂げた組合運動精神 (Linnar-Tin-ile, alle far sinne) とその實現運動である。テニイ

と思ふ。故に私は共同社会關係を基礎とする隣保事業はその過渡的手段として共同社会關係並に利益社会關係の混合形式を基礎とし、事業經營上の二次的從屬的の指針として利益社会關係に適應して共同社会關係の確立發展を目的し、その典型としての産業組合運動特に消費組合運動の確立發展を企圖せねばならぬことを考へるのである。

要するに私は以上略述する所によつて隣保事業の社会的基礎は主として共同社会關係と利益社会關係の綜合形態といふ二次的の社会的基礎を持つ、故に此の基礎に立ち近世工場工業により弛緩された共同社会關係の典型としての家族關係の整序と確立、諸家族關係を以て組成せられる近隣關係の改善と促進とを始めとして地方小地域に於ける共同社会關係の完成を主眼とし、次に二次的

の過渡的手段として共同社會關係にのみ根底せず  
 さりとて現に優勢な利益社會關係に陥らして兩  
 關係の綜合形態に社會的基礎を置き共存共榮相互  
 扶助の社會意識の覺醒即ち組合精神の發揮並にその  
 實現運動の開展を意圖し、特に消費組合運動の組織  
 と發展に指向せねばならぬ事、而して個人生活の開

展と社會生活の促進の途を開き又その諸支障を除  
 去する爲めには意義ある社會教化と人間味のある  
 指導に俟たねばならぬこと、斯くして我々は隣保事  
 業の社會的基礎としその目的とする所の社會理想の  
 實現に近づき得ることを知るのである。

### 京都活動教報

七月一日午後二時本山に於て國光婦人會「人」  
 有田師、二日午後八時本山講堂に於て「法華  
 經講義」原田本山部長、八日午前六時成就院  
 護正婦人會「幸福」有田師、八日午前八  
 時先斗町共榮會「日蓮上人の人生觀」有田師、  
 九日午後二時正行院婦人會原田師、十三日午  
 後二日本山に於て宗經會「偉なる我日蓮上人」  
 原田師、十五日修學院中島別荘に於て「人類  
 の希望」有田師、○本山中行事の一たる納  
 涼大講演會は境内天臺内に於て其第一回思想  
 戰を、七月廿八日まで一週間毎夜八時より、  
 第二回は八月廿二日より廿八日まで毎夜八時

より開始せしが滿員の盛況を呈せり。講師及  
 聽者は「日蓮主義一班」原田日勇台下、「大和  
 民衆の自覺」萩原日道台下、「釋尊出世の本懷」  
 金光孝碩師、「東洋道德の特長」有田安道師、  
 「信佛の淨化」吉澤道映師、「人生の二大問題」  
 土持長達師、「内治外交論」藤原支師、「佛敎の  
 戰闘觀」井上金次郎君、「所感」坂倉西岳君等  
 にして、各師の熱誠は善く聽者の脚腕に激せ  
 り。○八月六日午後八時妙法寺統一青年會、聖  
 人の御敎に題ひて「吉塚師、八月十九日本山  
 に於て五國法要後講演「度脫吾衆生」原田本  
 山部長、八月廿二日午後三時久遠寺にて「五  
 國法に就て」吉塚師、八月廿七日午後八時修  
 學院中島別荘家庭講演「人生々活の基調」信

仰「土持師、八月廿八日午後二時本山開山會  
 「精神教化」信佛「金光師、(聖體)」  
 金澤教報  
 △地明會、八月十日立正寺に於て「日蓮上人  
 一代記」杉田常歌師△常樂會、十五日日本覺寺  
 に於て「本覺寺と男女六人の靈刑」榮野順吾氏  
 「日蓮主義の三大綱領」芝沼謙城師△地明會、  
 二十日立正寺に於て「原始佛敎に就て」杉田常  
 歌師△佛の靈光に浴して「芝沼謙城師△婦人  
 會、二十二日本長寺に於て「佛の日蓮上人能  
 仁二十師△天晴會、二十六日本長寺に於て「解  
 脫への道」芝沼謙城師

## 菩薩行に就て

### 本多日生

次は自利他品第十であつて、自利といふのは自  
 分が救はれること、利他は人を救ふことであるが、  
 これが最初に申した通り、菩薩は自他兼利すと言つ  
 て、佛の敎はその兩方を兼ねるのが宜いことになつて  
 居る、たゞ自分だけ助からうといふのは淺い考で  
 ある、又自分はごうでも宜い、人だけ助けるといふ  
 のも間違つて居る。人を助けて自分が助からぬとい  
 ふことは無い、自分が助からうと思へば人を助けな  
 ければならぬ。人を助けずして自分だけは助かり得  
 ない、人を助けて置いて自分が助からぬといふこと  
 は無いのである。この自利と利他といふものは相離

し得ないといふ哲學的の眞理を佛は敎へて居る。物  
 事の原因結果の關係を途中で考へるといふの變  
 態を生ずるけれども、本末究竟すれば、本當の自利  
 は利他から生ずる、又本當の利他も必ず自利を伴ふ  
 ものである、今日共存共榮といふ言葉が流行つて  
 居るが、やはりそれと同じ意味合になる、その事を  
 茲に説かれた。而してその所謂兼利は何より起るか  
 と云へば、不放逸と言つて傾けてはいかぬ。又多聞  
 思惟と言つて能くその事を聴き、さうして考へると  
 いふことが大事である。それから衆生を憐愍し精進  
 を勤行し、念心を具足すると言つて、ものを憐れみ、

能く臨み、さうして佛を信する、斯ういふことに依つてその利益は現在並に未來兩方に及んで行くのである。

さういふ風にこの自利他品では、自他兼利——自分も宜し人も宜し、さうして二世得益——この世も宜し後の世も宜しといふことにならなければ、佛の菩薩精神ではないと説かれて居る。

尙ほそこに佛の教を説く者の心得と、聴く者の心得が併せて三十二説いてあるけれども、それはあまりに詳し過ぎるので又別の場合に話さなければならぬが、その中の特に大事な事を御紹介して置くならば、教を説く人の心得の中では「至心説」と言つて、精神を籠めて説かなければならぬ。「隨義説」と言つて眞實の義に随つて説かなければならぬ。「喜樂説」と言つて勇ましく説くことを喜びとして説かなければ

の者も共に利益されるのである。その莊嚴とはどういふことかと云へば、第一は自分が謙遜をして、如何に學問があつても身分が高くとも、どんな調子の好い状態に居つても、人間といふものは佛様に對したならばあかん事の多いものであるといふことをへりくだつて考へるのである。さうして佛の教を聴き修行するといふことは、如何にも有難い嬉しい事だと考へて、たとひ一國の帝王であらうとも、一國の政治の實權を支配して居る者でも、教に向つた時には掌を合せてさういふ風に考へ、又人をして左様な考へを起さしめるやうにして行くのである。佛法の莊嚴の第一は慚愧と言つて、人間は足らぬ所の多いものであるといふことを反省する心、これを慚愧の服と言ふ。お互にえらい所もあるけれども、半面には人間は缺點が多いものであるから、その事を反省

ならぬ、どうも演説は辛いと云つて冷汗を流すやうなことではいかぬ、喜びねがつて説くといふ氣分が殊に大事である。それから聴く方の人は「樂聽」と言つて、ねがつて聴かなければならぬ、ねがつてといふのは、操ろなく引張出されるといふのではない、「あまり顔を出さなくても体裁が悪いから、ちよつとごま化しに一逼顔を出して置け」といふやうなのは駄目なのである、自らねがつてその教を聴かなければならない。又「至心聽」と言つて精神を籠めて聴き、「恭敬聽」と言つてその教を説く人を尊んで聴く、さうしてその教を聴いては成べく忘れないやうに、何時も信心の心を以て教に向つて行くといふことが大事なのであると説かれた。詳しい事は略して置く。

次は自他莊嚴品第十一であつて、これは自分も他

して慢心を起さないやうにして行くのが菩薩の心得である。

それから二莊嚴品第十二に到つて、莊嚴に二つある。それは福德の莊嚴と智慧の莊嚴と言つて、他の言葉で言へば道德と智慧である。智慧の方に就てもいふ、能くわかつた人にならなければいかぬし、道德の方に就ても善い事をする人でなければならぬ。それには五つの事が大事だと説いてある、それは信心、悲心、勇健、世論を學ぶ、世業を學ぶといふ五つの事であるが、これは餘程能く整うて教へられて居ると思ふ。佛法の菩薩行といふものは決して頑固なものでない、迂遠なものでもないといふことが能くわかるのである。三寶を信じ、衆生を憐れみ、しつかりした精神を有つて何事に就ても力強く爲し遂げようとする決心を有ち、さうして世間の書物を讀み、

事柄も能く研究して、その上に世業と言つて世に立つて行くところの職業を選んで、商業でも、工業でも、農業でも、その自分の職業に精出して行かなければならぬといふことを教へて居る。「俺は菩薩行に入つたから商賣などはやめてしまふ」、「菩薩行は世間の事などは構はないものだ」……さういふものではない、世論を學び、世業を習ひ、さうして勇健に、その奥には慈悲と信仰とを有つ、そこに世間出世間を調和したる菩薩が出来るのである。これも何もさうむづかしい事はない、又これを斥くべき理由が無い、この五つの要素を捨て、人は世に存することは出来ぬものである。

次は攝取品第十三であるが、攝取といふのは弟子や信者を拵へて行くことである。大分菩薩がえらくなつて弟子取が出来るやうになつた場合にはどうす

るか、その場合に教へることはやはり傾けるなといふこと、敬ひの心を失ふなといふこと、信心を失ふなといふことこの三つを主にして弟子信者、後輩の者を導いて行くのである。故に國王に對してもやはり慈悲の心を失はないやうにと説くことが大切である、菩薩が國王に向つた時には、國王たる者は仁愛の心を失ふなかれと説くのである、國民に對しては忠愛の心を失ふなかれと教へるのである。さうして道徳には因果の法則が行はれ、善を爲せば必ず善き報ひが來ることを深く信せよと説くのである。斯ういふ事も人間として爲さねばならぬ事である。

次は受戒品第十四で、戒律の事に就て説かれて居るが、これも決してむづかしい事ではない。六方禮拜に托して説かれたので、娑羅門はたゞ東を拜み、南を拜みして方角に頭を低げて居るけれども、佛法

で在家菩薩が六方を禮拜するのはそこに意義がある。東に向つて頭を低げた時には父母の恩を思うて、父母の慈愛を忘れぬやうにするのである、即ち東は父母と思つて頭を低げる。南に對しては師匠の恩を思ひ、西に對しては妻子の恩を思ふ、夫から言へば妻や子があつて人生といふものをつくつて居るのである。妻や子は唯だ厄介者だと思ふけれどもさうではない。それと共に人生の幸福を享けて居るのであるから妻子の事を忘れてはならぬ。それから北を向いた時分には善知識の恩を思ふ、前に師匠の恩はあつたけれども、これは特に佛法の事を教へて呉れるえらい人の事を忘れぬやうにする。下を向いて頭を低げる時には奉公人の事を考へ、上を向いた時分には尊き佛や又日蓮聖人のやうなえらい人の事を考へる、さういふ風にして方角は六方だけれども、内容は父

母、師長、妻子、善知識、奴婢、沙門等を念するのであつて、それが佛法の禮拜行の精神である、たゞ頭ばかり低げて居る譯ではない。

さうして佛法戒律の根本精神は佛を信するのであるから、如何なる事に出會うても佛よりは離れない、佛の教を載いたのであるから教は捨てない、如何なる議論に依つて叩かれても、容易に自分の信仰は動搖を受けないといふ、その決心が戒律の根本である。戒を持つと言へば、腹が減つてもお粥を食つて居るとか、寒くても單衣物を着て居るとか、そんな事ではない、精神的の事が出發點である。至心に三寶を歸依して動轉を受けないといふことが佛法の戒律である。さうして在家菩薩であるから、戒といふものはそんな食ふ物も食はずにお粥を啜るといふやうなことではない、やはり商賣を勉強するといふことが

在家菩薩の第一の心得である、世事を學んでそれに  
通達し、さうして利益を得たならば無駄遣ひをせぬ  
やうに、第一に父母に孝養を盡し、自分なり妻子な  
りの生活を支へ、更に資本を増して商賣を擴張し、

尙ほ貯蓄をして不時の災難に備へるやうにしなければ  
ならぬ。さうして財産を大切にすることに就ては不確  
實な所に預けてはいかぬ、老人に預けてはいかぬ、  
あまり遠方に預けてはいかぬ、悪人に預けてはい

かないといふやうに、いろ／＼の注意をされて居る。  
これを銀行にしたならば、少々利子が良いからと言

つても薄弱な銀行に預けるといふことは、在家菩薩  
の警むべきことになる、財を守護するに就て不注意  
の無いやうにせよと説かれて居る、さうして最初に  
申した菩薩行の一分、少分、多分、満分といふこと  
に就て、戒に就ても最初からおちけてしまつてはい

けない、全部がやれなければ少しづつでも宜しい、  
出来るだけやらなければならぬといふことを獎勵さ  
れて居るのである。

次に淨戒品第十五に於て戒の根本精神を明にして、  
三寶を信じ、因果を信じ、さうして自分の心を能く  
考へる、心を考へるといふのは、油斷をすれば悪い  
事をする、誠めれば人間は尊き精神があるといふこ

とをよく考へるのである。その三つの事柄が戒に就  
ての根本である、たゞ寒い時分に單衣物を着て慄へ

て我慢をして居るといふやうなことではない。  
更に息惡品第十六には、悪い事をやめるといふに  
就て教へられて居る、それはどうしたら宜いか、た  
ゞあれもしてはいかぬ、これもしてはいかぬといつ  
て小言ばかり言つても惡事はやめられるものではな  
い、先づ佛を信する心を強めよ、さうすれば自ら

惡い心が滅つて慈悲の心、明るき心がだん／＼發達

して行く、即ち信仰に依つて惡を斥け、慈悲と善と

を發達せしめることが出来ること説かれた。

供養三寶品第十七には、三寶に供養するといふこ

とはどういふことであるか、佛を供養すると言つて

も、華を上げたり、御馳走を上げたりすることでは

ない。何處へ行つても自分の心が佛と離れないやう

に、ちよつと想ひ起せば「佛様が何時も自分を護つ  
て下されて居る、有難い」といふ考の起るやうに、  
繫念尊重といふことである。繫念はそこへ念を繫い  
で置くのである、例へば母親が子供の事を思ふので  
あつたら、雪が降るに就ても、この寒いのに子供は  
どうして居るか、暑ければ暑いで暑さに中てられは  
しないかといふ風に、何時も念が繫つて居ることを  
言ふ。佛を大切にするとはいふことである。

法を大切にするとはいふことは如説修行である。説かれた事を  
その通りに行ふて行くのである。たゞお經をジャブ  
／＼讀むことではない。僧を大切にすることは衣食を  
供養すること、着物や食物を供給することである、  
これを供養三寶と説かれた。

それから六波羅蜜品第十八に到つて六波羅蜜のこ

とをいろ／＼説かれて居るが、その詳細なることは  
後に譲つて、たゞその中の要點を申すならば、この  
中に布施をすることに就て注意されて居る。布施を

するからと言つて、自分の父母や妻子眷屬が困るに

も拘らずたゞ平等といふことの爲に、今日の社會主  
義や共産主義のやうに、自分の父母妻子を顧ずして

財を散してしまふ、世の爲には捧げたけれども、父  
母妻子は困難して居るといふやうなやり方は、善根  
とは名けない。布施に就ては親疎の別を立て、先

づ親しき者を大切にし、餘力あれば一般の者に及ぼすのである。併し社會事業的の事は無論獎勵するの

であるから、財實餘りある者は色々の社會事業をするが宜しい、それには第一に病院を拵へ、或は養育院のやうなものを拵へて、食へない者に食はしてやるとか、施療所を設けるとか、或は山道を整いて通るのに便利にするとか、又長い道に井戸も無くして通る者が困るならば井戸を掘つてやるとか、樹を植へて日蔭を拵へてやるとか、温泉が涌く所ならば開發してやるとか、又不便な長い旅行をする間に休み場所も無いやうな所ならば、所々に休憩所を設けて蒲團の設備などをして旅行者に益するとか、いろ／＼さういふ様な實例を擧げて社會事業的の事を澤山説かれて、それ等をする事はやはり布施の精神から出て來ることであるといふことを布施行に就て説明

されて居るのである。

尙ほ六波羅蜜の六つの事柄に就て詳細に説かれるので、以下二十八品まで優婆塞戒經は續くのであるが、この六波羅蜜の事は優婆塞戒經ばかりでなく、佛經のすべてに亘る菩薩行のことであるから、次回に詳しく評論して見たいと思ふ。(次續、第一講終)

### 大阪教報

八月八日蓮成寺にて「信心と善徳」和井田氏。「日蓮主義者の使命」京羅布教師△十日堂園寺にて「宗教の五綱」上田師。「思想の善導」に就て「京羅師△二十一日刀根療養所にて「念三千論」京羅師△二十五日徳永宅にて「五種の修行并口氏。「決定不動の信念」京羅師。何れも熱心なる求道者多數來聽多大の効果を奏せり。

## 肺結核治療の秘訣 (第四回)

名古屋更生醫院 醫學博士 奥田史郎

### 空氣療法に就て

食餌の良否が榮養に關係して體の抵抗力を増減し病勢に影響すると同様に、空氣の良否は身體により重大な影響を及ぼすものである。即ち不潔な空氣は全身及病肺に非常に有害に作用するものであるが、之に反して新鮮清淨で酸素に富み、種々の夾雜物を含有しない良空氣は組織細胞に旺盛な活力を與へ其機能を振興せしめ、疲勞感、盜汗、發熱等を驅除し食慾を催進せしめ積極的に體の自然治癒力を増進せしめる作用がある。故に吾人が結核の治療に當つては能ふ限り多く清淨な空氣を攝取せしめる必要

がある。

空氣の清淨さは所によつて非常に左異がある。又室外と室内とを比較すると戸外の空氣は常に遙に清淨であるが、室内の空氣は有機無機の塵埃が非常に多くて不潔なものである。故に差支無きものは成るべく永く室外空氣中に在るを可とする。然らざる場合は窓を開放して室内空氣をして出來得るだけ室外空氣と同一條件にする事が肝要である。

斯様に空氣療法の原因は簡單なものであるが之を行ふには種々注意を要するものがある。先づ強壯な無熱患者又は微熱患者で一定の運動を許されて居

るものは室外の空氣清淨の所を選んで行はねばならない。又室内に留まる時は成るべく空氣の清い室を選んで窓を開放し室内空氣を清淨にせねばならぬ。次に安靜を要する患者でも戶外靜臥を可とする。然るに晝夜を通じて屋外に留まる事は不可能で、又雨天其他悪い天候の日は已むなく室内に留まらざるを得ない。殊に有熱患者では戶外に出て居るのが良くない事が少なくない。斯る場合には室内にあつて成るべく南面した椽側等に出て窓を開放し空氣の清淨を計つて靜臥するのが良い。

室外室内を問はず空氣療法を實施する時は常に頭部の日光直射を避ける必要がある。又感冒に犯されぬ様に風を遮り、毛布で軀を包んで保温を計る事、又夏日日光猛烈の時は日蔭を選ぶ等の注意が必要である。

與へるものである。自轉車に乗る事が呼吸器病に悪いのも此理由に外ならない。故に風強き場合は必ず風を避ける工夫が必要である。尙世人の多くは夜氣が身體に有害であると誤解するも夜間の外氣は實際に於て一層新鮮なもので反之夜間密閉室内空氣は一層の不潔に陥るものであるから窓の開放に順應した者は夜間と雖も實行する方が良い。前述の如く風が有害であるのと反對に寒冷は少しも恐るゝに足らないものである。初めは寒冷によつて氣道の加太兒が一時増悪する事もあるが慣れると決して害をなさないもので却つて肺癆療養上から見ると温暖の時よりも寒冷の季節の方が有利である事は實驗上認められて居る所なのである。但し氣温の變化ある事は別問題で之は風同様有害に作用するもので感冒の原因となる事が非常に多い。

患者が初めて空氣療法を行ふに當つては全く漸を追ふて慣れしめる事を忘れてはならない。最初は室内空氣療法より開始し、好天氣の時を見て次第に戶外靜臥に慣れて行く事とし時間も初は短きに過ぐ程度を可とするのである。最初より長時間實行せしめると興奮して不眠、眩暈、違和を感じて咳嗽を増す事がある。反之漸を追つて進めば斯る心配はない。

次に注意すべきは風と寒冷との問題である。一般に風に吹かれる事を空氣療法と誤解し、又寒冷が肺患に有害のものとして誤解する者が少なくない様である。勿論微風は通氣に必要なものであるが強い風になると既に有害で、体温を奪ひ易いので、患者によつては氣道の加太兒を惹起増悪するもので感冒の原因となり又氣壓其他の關係から肺循環に不良の影響を

最後に尙一つ云ふべき事は、空氣療法は重症患者には極めて慎重の態度を要する事である。病勢進行し發熱を伴ふ如き場合には、戶外靜臥より室内安靜を可とする。先づ開放療法から初め、漸次に度を増して順應せしめ行く事を忘れてはならない。反之初期の患者では更に一層空氣療法を嚴守せねばならぬ。之は初期の間こそ一層有効で且初期の間は將來病勢が如何になり行くかの分岐點にあつて尙更その必要があるからである。之には自宅で不完全に實行するよりも良氣候地で完全な設備を有する療養院で醫師の指導の下に實行する事を勧めたいのである。



聖訓摘要

本多日生

兄弟鈔

これは有名な御文章で、池上宗仲の子供が兄弟二人信仰をせられる上に就いて、兄さんの方は夫婦とも信心が確立して居る、弟さんの方は信心はして居つたけれども少しそこに不確な所があつた、親の方からは、兄は日蓮聖人に深入りをしたから家督相続はさせぬ、弟の方に譲らうといふやうな気分があつた。併し弟も信心をしかけて居るさうだ、ごつちも同じ様に信心するならば、やはり兄にやらなければならぬ、けれども弟の方が信心が動きさうぢや、そ

れに弟の嫁は家督相続が出来たならば信心などはやめても宜しいといふやうな顔をして居るから、やはり弟に家督を譲らうかといふ問題があつた、非常に面白い所である。その時に日蓮聖人がこの「兄弟鈔」を送つて、さうして兄弟夫婦四人、力を揃へて正義の信仰に立てよ、さうすれば親がどんな態度に出るか、それが本當に親に對する孝行であるぞといふことを教へられた。この「兄弟鈔」に依つて眼醒めて、兄弟四人夫婦、悉くが正義の信仰を確立したので、親父も遂に屁古垂れて日蓮聖人の弟子となつて、池上本門寺といふものが出来た、若し弟の嫁がグズグ

ズであつて弟がそれに引張られたならば、今日の池上本門寺といふものは出来なかつた譯である。その面白い關係がこの御文章に現はれて居る、いろいろ善い教訓があるので、殊に進んだり戻つたりするノラクラ信者には、非常に痛切な教訓であります。

拳をもて虚空を打てば拳いたからず、石を打てば拳いたし。悪人を殺すは罪淺し、善人を殺すは罪深し、或は他人を殺すは拳をもつて泥を打つが如し、父母を殺すは拳をもつて石を打つが如し。鹿を吠る犬は頭割れず、獅子を吠る犬は腸くさる、日月を呑む脩羅は頭七分に割れ、佛を打ちし提婆は大地割れて入りにき。所對によりて罪の輕重はありけるなり。されば此の法華經は一切の諸佛の眼目、教主釋尊の本師なり、一字一點を捨つる人あれば千萬の父母を殺せる

罪にも過ぎ、十方の佛の身より血を出す罪にも越へて候ひける故に、三五の塵點を經候ひけるなり。此の法華經はさて置き奉りぬ。又此の經を經の如くに説く人に値ふことは難きに候、説ひ一眼の龜の浮木には値ふとも、蓮の絲をもつて須彌山をば虚空にかくとも、法華經を經の如く説く人に値ひがたし。(遺文錄)

握り拳で空を打つても怪我はしないけれども、若し石を叩いたならば手に怪我をするだらう。對手に依つて罪の重い軽いが出来る、同じ殺すと云つても、向ふが悪人であれば罪が軽いし、善人を殺せば罪が重い。同じ殺すのでも他人を殺したのは、拳を以つて泥を打つたやうなものであるし、親を殺したのは石を打つたやうなものである、對手に依つて同一の行爲に罪の違ひを生ずる。犬が鹿に向つて吠へたか

らと言つても、何も犬は禍ひを受けないけれども、獅子を吠へたならば犬の腸が腐ると言はれて居る、俗羅が他の動物などを呑んだからと言つても、何も差支は無いけれども、日月を呑めば頭が割れてしまふといふ話がある、或は佛様に石を擲つた提婆達多は、地獄に墮ちたと言はれる。さういふ譯で、同じ事でもその向ふの相手に依つて罪の軽い重いがある、それで法華經に背くとか、本佛釋尊を擲つとかいふことになる、非常な重い罪を受ける譯である。日蓮が今真に心の底から悲憤の涙をそそぎ、又種々に慷慨の感じを抱くのは、世間の人々は善い事をして居るやうに思つて居るけれども、一切經の第一と言はれた法華經を擲ち、一切經を興へ給ひし釋迦牟尼佛、顯本すれば三世十方を貫く本佛であらせられる釋尊を擲つといふことでは、この罪はどれ程重いか

分らん。法華經に依つて見れば三千塵點劫、五百塵點劫といふ限りもない長い間地獄にさまよふといふことは、左様な大きな罪の爲に起ることぢやと説いてあるが、丁度獅子を吠へた犬は腸が腐るやうな譯で、本佛に及向ふ所の諸宗の人達は、その罪恐るべきものだと思ふ。假ひ一眼の龜が海の中で浮木に値ふことがあり、蓮根の中の絲を以つて須彌山といふ大きな山を空に釣り上げることが出来ても——そんな事は容易に出来ぬけれども、假に出来るとして、法華經を教の儘に、釋尊の本意の通りに説く人に出會ふといふことは容易に出来ない。曾て慈恩大師が「法華玄贊」を作り、或は嘉祥大師が「法華玄論」を書き、或は實雲法師が「法華義軌」を作り、いろ／＼高僧と言はれる人も法華經の事を書いたけれども、何れも間違つて居る。法華經を褒むるに似

て法華經の心を殺す」と傳教大師が言はれた、正面には法華經を擲つて居るやうだけれども、法華經の真隨に背いて居るが故に、その人は皆罪を作つたといふことになつて居る。それが今は褒むるのではなくして、いきなり頭から反對に立つて、法華經は難行道とか、詰らぬとか言はうとするのであるから、如何にも恐るべき事である。又今や法華宗は段々弘まつて居るけれども、やはり法華經を經の如くに説かうとせずして、私を混へて、法華經の教義精神のある所に違反したやうなことを默認せんとして居る者が非常に多くなつて居る。だから一眼の龜が浮木に値ふことがあらうとも、法華經を經の如くに説く人に値ふことは出来ないと思はれた。私が出家をして自分の師匠と戴いた兒玉日容といふ人などは、盛んにこの「兄弟鈔」の事を引いて教訓をして呉れ

ました、今から思へば日容上人は實に正義の人でありました。この統一閣が常林寺といつた時分に東京の方の學校の校長で来て居りまして、遂にこの常林寺に寄宿して居つて、此處で入寂せられたのであります。その日容上人の正義の念に厚かつたことは、多くの人の知つて居ることであります。さういふ人に自分が導かれて、幸に御遺文を拜するにしても、どうしても正しい觀念を持つて行かなければならぬ、學問や理窟を捏ね廻はした所が、自分の信念、自分の道念といふものが正義を尊重する觀念がなかつたならば、何にもならないものである。不肖ながら萬一にも日蓮聖人の正義の發揚に貢献することが出来るとしたならば、洵に有難き正法の師を得て自分が導かれたことを、今更感謝しなければならぬと思ふのであります。

今二人の人々は隠士と烈士との如し、一も欠け  
 なば成すべからず。譬へば鳥の二つの羽、人の  
 兩眼の如し、又二人の御前達は此の人々の體那  
 ぞかし。女人となる事は物に随つて物を隨へる  
 身なり、夫樂しくば妻も榮ふべし、夫盗人なら  
 ば妻も盗人なるべし。是れ偏に今生ばかりの事  
 にはあらず、世々生々に影と身と華と果と根と  
 業との如くにておはするぞかし。木にすむ蟲は  
 木を食む、水にある魚は水を啖ふ、芝かるれば  
 蘭泣く、松榮うれば柏よるこふ。草木すらは是の  
 如し。(遺文錄 一一四三)

これは最初に申した夫婦心を揃へて爲さらなければ  
 いかぬといふ事で、夫の方は既に正義の信仰にあ  
 るのであるから、それが自分が考へを違へて、遂に  
 親も迷ひの方に行くやうなことがあつてはならぬと

て来てその行を妨げやうとする、その時分に刀を持  
 つて居る力の強い者が、ごんな怖い事があつても變  
 つた事があつても、聲を出したらモウそれ限りその  
 行が成就しない。そこで餘程勇氣の強い、假令化物  
 が出て來やうが、頭を斬りに來やうが「アッ」とい  
 ふやうな事は言はない強い人間を見出して、それを  
 頼んで大きな刀を持たして、その隠士が行をやりか  
 けた。「假令ひ死ぬやうな事があつても君は物を言う  
 ては困る」、「烈士曰く、死すとも物は言はじ」――  
 承知した、俺は頭ぐらひ飛んだつて物は言はぬとい  
 ふので、やりかけた所が、夜中過ぎになつて段々森  
 々と更け渡つて來た、隠士は一生懸命に秘法を盡し  
 て呪文を唱へて居つた所が、豈圖らんや、あれ程固  
 く約束した烈士が「ワッ」と言つて聲を揚げた、  
 それで折角の行が崩れてしまつた。そこで「お前は

いふ思召で、あなた方兄弟二人、その女房となつて  
 居る婦人二人といふものは、洵に大事な關係である、  
 「隠士と烈士の如し」といふのは、この前の所に「西  
 域記」を引いて詳しい話が出て居る。その話の大体  
 を申せば支那三藏の「西域記」の中に面白い話が書  
 いてある、天竺の鹿野園といふ所に一人の隠士と言  
 つて、丁度仙人のやうな婆羅門の法を修行する者が  
 居つた、それは餘程えらい人であるけれども未だ虚  
 空を翔ることが出来ない、そこで行を積んで一つ虚  
 空を翔るやうになりたいと考へた、これには秘法を  
 やらなければならぬ、その秘法は一人の力の強い烈  
 士といふ者を頼んで、大きな刀を持たして、壇を拵  
 へてその壇の隅に刀を抜いた儘で持たせて立たして  
 置いて、さうして自分が徹夜婆羅門の秘法をやる、  
 さうすると段々夜が更けて來るに従つて惡魔がやつ

一体どういふ譯だ、あれ程約束したのにお前がさう  
 いふ聲を出したから、俺の行はモウ成就しない、非  
 常に残念な事だ」と言つて隠士が落膽して「何故お  
 前は約束を違へたか」と言つて責めた、所が烈士が  
 言ふには「ごうも濟まぬ事をした、實は斯ういふ譯  
 だ聞いて呉れ、自分がツイちよつと居眠をした所が、  
 昔非常に恩を受けた主人がやつて來て、いろ／＼の  
 話をしかけるけれども、ごうも物を言うては君に約  
 束をした手前濟まぬと思つて、黙つて居つた、所が  
 俺が非常に世話になつた主人であるから怒つて、お  
 前はいろ／＼の世話をしてやつたのに物も言はぬ、怪  
 しからん奴だ、頭を刎ねてしまふといふけれども、  
 仕方が無い、物を言うては君に濟まぬと思ふから黙  
 つて居つた、所が愈々頭を刎ねられてしまつた、さ  
 うして自分は靈魂だけ脱け出て宙にさまようて、向

ふに行きかけに、自分の斬られて居る姿を見た所が、如何にも可哀さうになつて、お前と約束した爲に俺はあの通り胴と頸が別々になつて、幽霊になつて飛出すやうな事になつた、ア、飛んだ事をあの男と約束したものだと思ふ感じだけれども、それでも未だ約束は重いと思つたから、泣きもしなければ聲も揚げずに段々行き居つた所が、今度は自分の果報に導かれて、南天竺の婆羅門の家へ宿ることになつた、さうしてお母さんの腹の中に居る間もいろ／＼苦しい事があり、生れる時分にも辛い事があつたけれども、それでも物を言うてはならぬと思つて、大抵の赤ん坊は生れた時に「オギャア」と泣くけれども、俺だけは泣いては済まぬと思つて黙つて居つた。その中に段々大きくなつて年も取つて、愈々嫁を買ふことになつた、幸に非常に容貌の美しい氣に入つた嫁

さうした所がヒョット眼が醒めてそれは夢であつた、それでとう／＼やり損つた譯だが、俺は随分辛棒して言はずに居つたのだから勸辨して呉れ」と言つたといふ事が詳しく書いてある、その事をすつと書かれて、それに付け加えて日蓮聖人が言はれるには「こんな婆羅門の浅い修行の中にも、一つの事を成就しやうとすればさういふ妨が起つて来る、この烈士も決して約束を違へやうとは思はないでも、そのやうな夢を見て、堪へに堪へたけれども、可愛い子供を愈々殺されるといふ時になつて、モウ耐へられんといふので聲を發した所が、それは惡魔の妨げた所の夢であつた、それで遂にその行が成就しなかつたといふ事がある。況してや佛法の中の正法たる法華經の行を積んで、さうして目的を達しやうとするには、思はぬ所から聲を揚げなければならぬやうな

が来た、その中に子供も出来たりしたけれども、自分分は些つとも物を言はなかつた。所が嫁が丁度六十五になつた、その時に嫁がいふには、あなたは匿ではない、匿なれば物言はいてもよいけれども、物を言へるのぢやないか、物を言へるのにこの何十年の永い間、いろ／＼話すべき事もあるのに、女房にも子供にも一言の言葉もかけないといふのは、餘りに無慈悲な人だ、今日はあなたが返事をして呉れないならば、自分にも覺悟がある、あなたの可愛い、この子供を眼の前で刺し殺してしまふと言ひ出した、それでも自分は物を言うては君に済まぬと思つたから黙つて居つた、所が女房が怒つて、愈々それでは仕方がないといふので、泣き悲みながらその可愛い、子供の咽喉笛を押へて剣を突き込みかけた、そこで自分も堪らなくなつて、ア、待つて呉れと言つた、

事が出来て来る、そこを能く堪へて過ちを取らぬやうにしなければならぬ。その事を茲に引いて来て、丁度あなた方兄弟の奥さん二人が、隠士と烈士のやうなものである、今弟の嫁さんの方が聲を揚げさうだから、それを聲を揚げてはいけないといふ事を日蓮聖人が言つたのである。だからあなた方二人は隠士と烈士との如く、「一も缺けなば成就すべからず」である。大体女は表面はさうしても柔順になければならぬけれども、精神の正しい事を貫くといふ考へは男に負けてはならない、寧ろ女は表面に於いて随つても正義といふ事に就いては男を導く考を持たなければならぬ。それであるから今度の大事に就いては、夫の氣が弱ければ婦人から之を鞭撻して、正義の信仰を過たぬやうにさせるのが、あなた方の任務だといふことを

仰しやつたので、他にもそれに就いて詳しい御遺文  
 があります、それと照し合せると、この御文章の  
 意味は洵に能く判かるのであります。私は深く之れ  
 を感して居るのであります、男と女との關係はか  
 りではない、友達同士でも又僧侶と信者との間でも、  
 一緒に事を仕かけて居る者が、途中で聲を揚げる者  
 が多い、皆聲を揚げる、一人や二人なら未だ宜いけ  
 れども、椽の下からも揚ければ二階からも揚ければ  
 皆聲を揚げる、さうして後から聞いて見れば「イヤ  
 實は斯ういふ譯で、よく／＼の事であつたものです  
 から、濟みませんけれども……」といふやうなこと  
 ばかり言つて居る、そこは本當に貫く人間に就いて  
 は餘程考へて置かなければならぬ。又中々強いやう  
 に見えて弱い者がある、例へば鍛へない銅鐵は非常  
 に強いやうであるが、ボキリと折れてしまふ、日本

刀のやうに百鍊の鐵でなければならぬ。日蓮聖人の  
 正義を貫くに就いては、唯だ表面だけ堅いやうなこ  
 とであつてはいけない、餘程よく鍊つて行かなけれ  
 ばならぬ。先づ貫き通すことに於いて初めて値打が  
 判る、「始中終、貫き通す者如来の使なり」と日蓮聖  
 人が言はれた通り、始めも中も終りも完全に正義を  
 貫き通した時、初めて日蓮が弟子と名乗り得る者で  
 ある。それに就いてこの仙人の法をやつた婆羅門の  
 話、隱士と烈士との聲を揚げたといふやうな話は、  
 餘程興味のある話でありますから、能く御記憶にな  
 るが宜からうと思ふ。

### 王舎城事

あへて憎みては申さず、大慈大悲の力、無間地  
 獄の大苦を今生に消さしめんとなり。章安大師

云く、彼が爲に悪を除くは即ち是れ彼が親なり  
 等云々、かう申すは國主の父母一切衆生の師匠  
 なり。(遺文錄 一一四八)

これは何と仰せられて居るかといふと、日蓮は随  
 分ひどい事をいふ、人を攻撃もするが、それは決し  
 てその者を憎んでいふ譯ではない、「左様な事をして  
 は地獄に行く」とか、「國が危い」とかいふやうな事  
 をいふのも、敢てその人を憎み、國を憎んでいふの  
 ではない、大慈大悲の心から、ごうぞ過ちを取らぬ  
 やうにさせたいと思ふ一念、恰かも父母なり師匠な  
 らば、子に對し弟子に對して言ふやうな氣分を以つ  
 て、日蓮は人に對し國に對して、侃々諤々の論をも  
 吐くのであるけれども、決して憎んでいふのではな  
 いといふ事を、最も明白に言ひ現はされて居る、日  
 蓮聖人の御一代の活動は、全くこの御精神であつた

らうと思ふ。だから少々強い事があつても、それを  
 唯だ悪く解釋してはいくまいと思ふ、日蓮が人格が  
 低いから言ふとか、人を憎んで言ふとかいふもので  
 はない、實際にその人を憐れむ精神切なるが故に、  
 苦言を呈する譯であつたらうと思ふ。

### 法蓮鈔

これは既に全文を御紹介致しました。

### 上野殿御返事

この中には特に御紹介する所もありませぬ。

### 一谷入道御書

去る弘長元年(太歳辛酉)五月十二日に御勘氣  
 を蒙つて、伊豆の國伊東の郷といふ處に流罪せ

られたりき。兵衛介頼朝の流されてありし處なり。さありしかども程無く同三年(太歳癸亥)二月二十二日に召し返されぬ。又文永八年(太歳辛未)九月十二日重ねて御勘氣を蒙りしが、忽に頸を刎ねらるべきにありけるが、仔細ありけるかの故に、暫くのびて北國佐渡の嶋を知行する武藏の前司預りて、其の内の者どもの沙汰として彼の嶋に行き付いてありしが、彼嶋の者共因果の理をも辨へぬ荒夷なれば、暴く當りし事は申す計りなし。然れども一分も恨むる心なし。(遺文録)

この「一分も恨むる心なし」といふ一言が、全く日蓮聖人の宗教的人格を言ひ現はして居ると思ふのであります。前には伊豆の伊東に流され、後には佐渡に流され、さうして佐渡の嶋では随分荒夷のやう

な人々の爲に酷い目に遭はされたけれども、日蓮はそれを少しも恨むといふことはない、却つて法華經の御爲の御奉公であり、功德が積まれると思つて喜んで居ると言はれて居る。これは伊東の流罪の時分には「四恩鈔」といふ御書があり、佐渡ヶ嶋の御流罪に就いては「佐渡御書」があつて、この二書を御覽になれば、唯だ簡単に斯う言はれて居るだけでなくして、その精神の状態を非常に詳しく語つて、却つて流されたのは有難いといふ風に感謝の言葉を述べられて居るのであります。それから

此の法門を申し始しより命をば法華經に奉り、名をば十方世界の諸佛の淨土にながすべしと思ひ儲けしなり。弘演と云ひし者は主衛の懿公の肝を取りて我が腹を割いて納めて死にき。豫讓と云ひし者は主の知伯が恥をすゝがなが爲に、

劍を呑んで死せしぞかし。是は但だ僅かの世間の恩を報せんが爲めぞかし。況んや無量劫より已來六道に流轉して佛にならざりし事は、法華經の御爲に身を惜み命を捨てざる故ぞかし。

(遺文録 一一七六)

これは實に日蓮聖人の義憤を能く言ひ現はして居る、日蓮聖人が法華經に就いて教を語り始めた時から、此の法門を申し始し時より、命をば法華經に奉り、名譽は佛の世界に流さうと考へて居つた。世間でも弘演といふ者は主人の爲に腹を割いた、豫讓は主人の爲に劍を呑んだといふことがある、これは實に皆立派な忠義の人であるが、日蓮はこれ等の人々を敬慕して居る。併しそれは世間の恩を報せんとしてである。今法華經に依つて考へれば、佛と我等の關係、法華經と我等の關係は、實にそれ以上深い所

の御恩を受けて居る、佛恩、法恩いかに深い譯である。それ故にその恩に報せんが爲に、日蓮は命を捨て、御奉公申して居るのであるといふ事を述べられた。續いて

されば佛になる道は、時により品々に替つて行すべきにや、今の世には法華經はさる事にておはすれども、時によりて事異なるなれば、山林に交はりて讀誦すとも、將又里に住して演説すとも、持戒にして行すとも、臂を焼て供養すとも佛にはなるべからず、日本國は佛法盛なるやうなれども、佛法について不思議あり、人はれを知らず。(遺文録)

これは最も日蓮聖人の眞意を言ひ現はした所で、法華經といふ教は一つであつて、修行のしかたは時に依つて違ふ、今や山林に交つて朝から晩までお經

を讀んだり、或は里に出て法華經の宣傳演説をしやうが、戒律を堅固に守らうが、それでは佛になれない。何故成れないか、そこに一つの大事な點がある、これが日蓮聖人の固く信じて居られる點である、その一つの事といふのは次に自ら申して居られる。

今の日本國は法華經に背き釋迦佛を捨つる故に、後生は必ず無間大城に墮ちん事はさて置きぬ、今生にも必ず大難に値ふべし。(道文續)

唯だ法華經を供養するとか、演説するとか言つても、他の誤れる者達が法華經を譏り、或は釋迦牟尼佛を抛つやうな宗教を立て、居るもの知らん顔をして、左様な誹法反對の者と妥協的態度を取つて、法華經を弘めやうとするならば、それは駄目である、假令ひ里に住して演説しやうとも、臂を焼いて供養しやうとも、この釋尊の絶對の意義を明かにしない

段々根が緩んで、私共驚くやうな事がある、私共は小さい時分から日蓮主義の教化を受けて來ましたから、「まさかに」と思ふけれども、随分田舎なごに行つて見ると、さういふ日蓮主義的の規律が紊れて居る。「ナーニ、宗旨の違ひなどはどうでも宜しい」と言つて、營業本位といふか、時に依つたならば眞言のお寺に行つて、眞言の袈裟をかけて、お經は知らないでも「ムニヤ〜」と言つて誤魔化して、葬式の席に坐つて、さうしてお布施だけ貰つて歸るといふやうな者も居る。神戸あたりでは坊さんがお寺でなくして葬儀會社に備へられて居る、さうして葬式がやつて來ると「今日は眞言だ」「ア、さうか」といふので眞言の袈裟をかけて出る、少しばかりその方のお經を覚えて居つて「ムニヤ〜」というて誤魔化す、信者の方は頭さへ揃へば誰でも宜い、「今日は何

やうな行き方は駄目である、同じ法華經と言つても、唯だお經を讀んで居れば宜しいといふので、随分各宗の者が寄つて普門品を讀むといふやうな事をやつて居る。この間も或る所に行つたところが、さういふ事をやつて居る、悪い事でもないやうなものだけれども、平素は分れて「法華經などは駄目ぢや」と言つて居る連中と一緒になつて、その時だけ「念彼觀音力々々々々」とやつて居る、さういふ風なことで法華經を讀まうが、法華經を演説しやうが駄目である。今の世俗一般の傾向は、日蓮主義を除いて他のやり方は、法華經に對しては殆んど左様な者ばかりである、平生はいろ〜な事を言つて居つて、面と向へば「イヤ、私の方でも法華經は大切にします」といふやうな事をいふ、それでは駄目だと日蓮聖人は仰しやるのである。日蓮宗の人でもこの頃は

人の役僧だ」といふだけの事で、他所から雇つて來る。「今度は禪宗だ」「さうか、それぢやアこつちの袈裟だ」といふ譯で、禪宗の衣を着て袈裟をかけて出て來る、一種の營業である。さういふ事が随分起つて居る、苟くも日蓮聖人の流れを設んで居る者だけは、この教をさういふやうな商賣の爲に犠牲にしたり、僅かな事情の爲に規律を棄てるやうな事のないやうにしたいと思ふのであります。思想の上から紊れるといふこともあるけれども、大體はさういふ墮落した精神、教を輕んじて左様な利益を貪るが爲に起ることが中々多いのである、釋尊の教にも呉れ〜説いてある、どうぞ日蓮主義の人はさういふ事の無いやうにしたいと思ひます。



## 太郎星

杉山義樹

或る闇の晩のことでありました。キラ／＼と輝いてゐた澤山の星の一つが、どうした拍子にかスーッと細い銀の線を一と筋插いて、地球の上に墜ちて来ました。この星は、太郎星と云つて大變に賢い星でありました。

太郎星は、大勢のお友達を集めて、鬼ごっこをして遊んでゐましたが、その内にスツカリ夢中になつ

て了つて、勢ひよく駆け出した機に、黒雲に躓いてすつてんころりと轉んだのでありました。

太郎星が、冷たい夜風に氣がついた時は、東の空が薄ら明りの夜明け頃でありました。

「おや！こいつは變だゾ。」と太郎星は色々考へてみました。黒雲に躓いて轉んだまでは思ひ出すことが出来ました。

「それきり眼が眩んで覺えがないんだが、こいつと、フーン」とよく考へて見た太郎星は、漸やく自分が下界へ墜落したことに合點が行きました。そして家

のことを考へ出して、  
「お父さんやお母さんが、ナゾ心配して居るだらうナ」と急に悲しくなつて了ひました。

その間に夜はスツカリ明けて了つて、遙か向ふの山の上に、太陽のおちさんが赤い顔を出しました。  
「ハハア、あの山の天頂まで行つたら屹度雲の上へ登ることが出来るに相違ないゾ」と考へた太郎星は痛む腰を擦り乍らトボ／＼歩き出しました。

やがて太郎星は、山の頂天に登りついて、ヤレ嬉しやと悦んだのも東の間、太陽のおちさんは何時の間にか、山から離れて高い空に昇つて居りました。  
「あ——ア」と太郎星は、落膽して途方に暮れて了

いました。すると急に空腹を覺へて來ましたが、太郎星は一軒の百姓家を目的に又歩み出しました。  
漸やく百姓家の前までやつて來た時には、ヘトヘトに疲れてゐました。

そこで太郎星は其の百姓家の主人に、何か食物を恵んで下さい、と頼みました。

すると百姓家の主人は大層怒つて、  
「そんな立派な躰を持つてゐながら、恵んで呉れるとは何ごとだ。食物が慾しかつたらミツチリ働くんのだ。そしたら食事を與へてやらう。」と云ひました。  
太郎星は、成る程と思ひましたので、早速主人の命令通り空き腹を耐へて、汗水流してせつせと働きました。

主人は、太郎星の働いてゐる様を眺めて、「感心々々よく働いた。それぢや一ツウンと甘いものを御馳



走して上げやう。」と云ひました。

太郎星は大變に悦んで、一體どんな甘いものをウ  
ンと御馳走して呉れるんだらうかと、咽喉をグググ  
ウ鳴らして待つてゐました。

「ああ、素晴らしい御馳走だよ。彼所にあるから遠  
慮せずに食べるがいく。」と主人が指さしました。

太郎星は、その方角を一生懸命に見廻してみまし  
たが、何も見當りませんので、

「何所にですか？」と尋ねました。

「ソレ彼所の樹になつてゐるぢやないか。解つたか  
ね。」と主人は云ひました。

よくよく見れば柿の樹に、タツタ一つの柿がつい  
てゐるばかりでした。

素晴らしい御馳走が、タツタ柿の實一つと知つた  
太郎星は呆氣にとられて了ひました。

「餘り嬉しいんで呆然したね。ああゆつくりと喰べ  
るがいく。」さう云ひ残して主人はサツサと行つて了  
ひました。

太郎星は、でも折角の御馳走だから、と思ひまし  
たので、綿のやうに疲れ果てゝゐる絆に元氣をつけ  
て柿の樹に登りました。

すると何處からともなく、一羽の銀色の鳥が飛ん  
で来て、柿の樹にとまりました。

そして力のない聲で、悲し相にカア〜と鳴きま  
した。太郎星は可哀さうになつて來たので、

「オイ鳥君、ごうかしたかね。」と親切に尋ねてやり  
ました。すると鳥は泣き乍ら、

「實は三日間何も食べないんで、お腹が空いて、ろ  
く〜飛ぶことも出来ないのです。」と答えました。

太郎星は、大層氣の毒に思ひましたので、自分に

とつては大切な柿でありましたが、それを鳥に與へ  
てやりました。鳥は幾度も〜お禮を云つて、柿を  
食べて了ひました。そして太郎星に向つて、

「お禮として、私がこの柿の樹を天までとゞく様に  
してあげますから、確りとつかまつてゐて下さい。」  
と云ひました。

太郎星は大變喜んで、鳥の云ふ通り柿の樹に御馳  
走して上りました。

### 南洋サイパン嶋より 尊き教の消息

過般宗命を帯びまして南洋「マリアナ」群島の  
の主要地サイパン島に來ました。永年の間  
御世話になつた英の地を後にして多数の信者  
知己に送られて發足したのは五月一日午後二  
時の英艦隊の列車でありました。南洋各島  
新天地を心に描いて門司港から郵船の筑前丸に  
乗り込み五月九日正午に南洋サイパン港に無  
事到着致しました。築港事務所から出迎の方  
に譲られてトロッコに乘せられ約二哩許りを  
隔てた築港事務所の官舎に親子三人體を息め  
ましたのは午後五時半頃でありました。翌日  
一日を休まして頂きまして其後は毎日忙しい  
事務に従事して一日も休む事なく働いて居り  
ました。着島して十日頃に愚妻が熱い熱を

起しましたので置きましたが三日許りで全快  
致しました。私も桂一も至極壯健であります  
殊に桂一は身體が大きくなつた様に思はれま  
す。皆さん喜んで下さい。南洋の御馳走で日々  
如かな気分です。南洋の事を知らず  
に居る様です。私も實は知らずに来ましたが  
我が國の委任統治の範圍も知らず居つた私の  
愚かさを苦笑して居ります。是れから機會毎  
に皆様にお報致したいと思ひます。さしあ  
たり「マリアナ」群島の沿革と面積及人口、風  
俗、宗教など少し許り申上げて。又次回  
に何か申送事に致します。「マリアナ」群島は  
一千五百二十一年後の有名な葡萄牙の航海者

みついでゐました。すると、その銀色の鳥は「カア  
〜」と一と聲鳴いて、眩しい様な黄金の糞を柿の樹  
の根元にしました。  
すると柿の樹は不思議にも、見る／＼うちにグン  
／＼と伸びて行つて、何時しか雲より高くなつて了  
ひました。そこで太郎星は何んの造作もなく無事に  
家へ歸ることが出来ました。

「マリアナ」に依て發見せられたる島嶼で一千  
五百六十五年始めて西班牙の領分になつた所  
あります。時の皇帝「ヒツツア」四世の皇后マ  
リアナ陛下が主人の教化事業に御内帑金を御  
下賜せられました。其御徳を稱へんがために  
皇后の御名を冠して「マリアナ」群島と呼ぶので  
あります。此のサイパン島は「マリアナ」群島  
の一島嶼で主要地帯であります。一千九百九  
年の島嶼主要地帯の結果西班牙政府より比律賓  
及「マリアナ」群島中の巨額たる「グアム」島を  
奪取したのであります。爾時は亦た西班牙が  
戰後の財政甚だ困難なるを奇貨として是れが  
讓渡を提議して數回交渉の結果一千八百九十  
九年六月「マリアナ」島の二群島を僅  
か二千五百萬「ペセタ」日貨約九百六十萬圓許  
りて遂に買取したのであります。  
サイパン島は面積僅に十二方里許りで人口  
は純内地人は一千五百人許り沖繩人が約四千





### 社寺建築及臺灣檜材の安價提供 設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候  
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候  
(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なる水蓄不充分的なる檜材は于割狂ひ等の缺點多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地  
(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

#### 社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

#### 社 寺 工 務 所 鶴 見 支 所

福岡市外堅箱町馬出松原

#### 社 寺 工 務 所 福 岡 支 所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

#### 社 寺 工 務 所 大 阪 支 所

(電話西三三二四番)

一、耐久防蟻
二、蟻害絶無
三、香氣清楚
四、木質堅緻
五、理整然木
六、木高稚色

## 目 次

大法鼓經の概要……………	本 多 日 生
信行の基調を説ける觀音賢經……………	井 村 日 威
菩薩行に就て……………	本 多 日 生
肺結核治療の秘訣……………	奥 田 史 郎
不良少年の豫防に就て……………	相 馬 政 雄
聖訓摘要……………	本 多 日 生
五色の鹿……………	長 谷 川 義 一

第三十三年十一月號

昭和二年九月廿五日印刷納本  
昭和二年十月一日發行  
(第三百九十一號)

不 許 複 製

統 一 定 價		
一冊	金貳拾錢	送料共
半冊	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ月	金貳圓貳拾錢	送料共
一年	金貳圓貳拾錢	送料共
一ヶ月	金貳拾錢	送料共
半冊	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ月	金貳圓貳拾錢	送料共
一年	金貳圓貳拾錢	送料共
一冊	金貳拾錢	送料共
半冊	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ月	金貳圓貳拾錢	送料共
一年	金貳圓貳拾錢	送料共

編輯兼 國友日斌  
印刷人 鈴木日雄  
印刷所 三益社  
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地  
名古屋市東區千種町字五反田五二番地  
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地  
名古屋市東區田代町字城山七十七番地  
編輯所 統一編輯局  
電話東京五一〇七一番  
電話名古屋一〇八一九番